

誰も僕の言いたいことを分かってくれないのが、本当に悲しかった....



セバスチャンは、
会話と自立心によって成長しました。
今、Sebastianは自信に満ちて、大きな夢を持つ11歳の少年です。彼は脳性麻痺（Cerebral Palsy）を持って生まれました。しかしマイトビー（視線コントロールによる会話装置）を使って、以前は不可能であった色々な事が自分のできるようになりました。



生まれた時から、Sebastian Janssonは発話することなく生きてきました。彼の両親は、はじめはどこの親がするように彼の眼や顔の表情を読んで、何を求めているか理解しようとしていました。そのうち、絵やBlissシンボルを使って会話を始め、さらに数年後は学校でAACデバイスを使い始めました。

しかし「話すことはSebastianにとっては長ったらしく時間がかかり退屈することでした。その当時、彼が持っていたスキャンニング装置やBlissボードはどれも物凄い集中力が必要だったのです」と母親のSusanneは当時を振り返って語っています。

新しい技術による支援

ある視線を使ったコミュニケーションの情報イベントでの事、彼と両親は初めてトビーの名前を聞きました。マイトビーは装置の前で頭や身体自由に動かせるので、Sebastianにとっては最良の解決策でした。

それから程なく、彼はマイトビーを試す機会を持ちましたが、最初から、すばらしくうまく使えたのです。

「僕は、前は話そうとすると、いつもすぐに疲れてしまうし、言いたいことを伝えられないこともしょっちゅうあったんだ。誰も僕の言う事を分かってくれないから本当に悲しかったし、ガッカリしてた。でも今は他の人に何をしてほしいか書けるし、言えるんだ。」とSebastianは説明してくれました。

彼の目標が実現しつつあります。

Sebastianは学校でも家でも今はマイトビーを使用して書いたり、メール、会話、ゲームをしたり、音楽を聞いたり、絵を描いたり、宿題をやったり、また助けを呼んだりしています。

彼にとっては、足や声を使う代わりに彼の目を使ってコンピュータをコントロールするほうがはるかに簡単だと感じています。

Sebastianが見せてくれたように、アイトラッキング技術は人間の持っている可能性をより多く引き出してくれます。例えば学校で“書く”ことを例にとれば一日に4から5つの文章を日記に書いています。マイトビーを使う前は、たった2つの文章を書くのが精一杯でした。

「アイトラッキングのおかげでSebastianは簡単に会話ができて、毎日何時間もマイトビーの前に座っています。」と彼の母親は話しています。

家族全員にとっての大きな変化

どの家族にとっても、会話は原動力の中心です。マイトビーはSebastian一家全員にとって毎日の生活にインパクトをもたらしました。

「我が家もマイトビー使って普通の家庭と同じように交流しています。小さい男の子がするように彼も姉を泣かしたり、両親から離れて自立して多くのことを行っています。それは彼の個人の発達にとって非常に重要な事です。」と父親のThomasは話してくれました。

新しい能力は自負心を高めてくれます。

「私達はSebastianの成長と発達を見守っています。マイトビーを使い始めて、彼は大きく進歩しました。彼が以前は想像できなかった多くの機会に出会い、未来を夢見て、社会の中である位置を占める事を目指しているのを見て、親として心から喜んでいます。」と父親は話しています。

お問合せ先 **株式会社クreaクト Tobii社アシスティブ製品 総輸入販売元**

〒141-0022 東京都品川区 3-6-18 新倉ビル 2号館 6階

TEL: 03-3442-5401 / FAX: 03-3442-5402 メール: info@tobiiatj.com

URL: www.tobii.co.jp(トビー・ジャパン) URL: tobiiatj.com(クreaクト)

自由に世界と会話するーおしゃべりがとまらない

9歳の Astrid Lorenzen は声と彼女の家族やクラスメートと会話する最新ツールを手に入れました。

Astrid は生まれるとき、急性低酸素症に見舞われ、死亡が宣告されました。しかし彼女は死を克服して生命を取り戻し、今は9歳になっています。この1年間に、彼女は今まで想像できなかったような方法で、家族や他の世界とのコミュニケーションが出来るようになりました。

「娘が命を取り戻した時、可能な限り最高の生活が送れるよう戦い続けると決心しました。」お母さんの Dorte は言います。Astrid は誕生時の合併症で重度の脳性麻痺 (CP) を患いました。その結果、会話を通して言いたいことを人に伝える事ができません。8歳のときまで Astrid は身振りや、特別な本の絵を指し示すことで会話を行って来ました。

しかし 2007年12月からは、彼女はマイトビーを用いて周囲の人と会話をしています。「私が初めて書いた文字は “私の名前は Asrid です “ よ。それを私の新しい声で言えた時は本当にハッピーだったわ。」と Astrid は言います。

おしゃべりが止まらない

Dorte はマイトビーを Astrid が使い始めた時に家族内で起こった変化を今でも覚えています。「夕食時に活発に話している彼女を見て、まるで別な娘が急に増えたようでした。」

Astrid の双子のお姉さんたちは目を輝かせて「Astrid はちょっとお喋りしすぎなのよ」と言います。

「彼女が別の部屋にいる私を呼べるようになった事は私にはとっても嬉しいんです。ある日、突然 “ママ” と呼ぶ声が聞こえたんですよ。」Dorte は言います。

コンピュータゲームを楽しむ

Astrid は南デンマークで父 Willy、母 Dorte、13歳になった双子の姉妹 Ida と Emma、猫の Brum と暮らしています。2008年11月中旬のある雨の日お宅を訪ねると、Astrid は学校から帰ったばかりで、台所に座ってマイン・スウィーパーゲームをマイトビーを使ってやっていました。

Astrid は安全なお母さんの膝の上では内気な様子で座っていますが、ひとたび車椅子に座ってコンピュータスクリーンに向かうとおどおどしたところがたちどころに消えます。彼女の装置について聞くと 「いい音、ゲームができて、上手く書いてくれる」と書いた文章を自慢げに見せてくれ、女性の声で同じことがスピーカーから聞こえて来ました。

“All of a sudden
I can hear a voice
calling ‘Mom’”



数年前、両親は偶然ある IT 関連の展示会で P10 に出会い、「その時すぐにこれで Astrid は会話が始められると気づきました。」最初 Sonderjyllands 県は乗り気ではありませんでしたが、Astrid が学校で勉強や生活についてゆくのに必要な装置であると判ると支給が認められました。

テキストが言葉になる

Astrid はデンマークでもっと若いマイトビーのユーザです。今は3年生で 22人のクラスメートと同じレベルで学んでいます。以前は赤い本の絵を指していた彼女は、今ではコンピュータスクリーンを用いて友達と話し、先生の質問にも答えています。彼女はスクリーン上の文字を眼で見つめることで選択し言葉を作成し、それを声に変えています。また友達の写真見ると、その友達の名前を呼ぶこともできます。このように今では友達の名前を呼んで、簡単にそして正確に言いたいことが伝えられるようになりました。

「Astrid は突然年上の少女になったようです。学校や家庭で声で答えられることは重要なことで、家族との会話も簡単でいぶん自然になりました。以前は完全に誰かに頼っていましたが、今はマイトビーを使って友達とおしゃべりや、メールができることでより自立してきました。」

初めは物珍らしがられた MyTobii

約1年ほど前、初めてマイトビーが来た時、皆が集まって、この装置をただ物珍しがっていました。何がしたいの Astrid に聞くと眼を輝かせて大きな笑顔で「ゲームがしたい」と答えました。彼女はこの装置をよりスムーズに使えるようになりましたが、彼女にとって初体験であるより完全な会話が可能になるには、ゲームで遊ぶことも正確に眼を使ってコントロールする練習として良い方法でしょう。

家族や学校とは別に、Astrid は週に一度水泳と乗馬もやっています。またよく遊ぶ友達も何人かいます。

両親は期待を込めてこう語っています「来年は彼女のためにマイトビーが付けられる車椅子を買って、より自立できるようにします。そうなればもっと世界の人と話せる自由が広がってゆくことでしょう」